開発への好奇心 自己研鑽

ウレタン技研工業社長 石井 隆来さん

出会い その時

人生支えたウレタン材研究

ポリウレタン樹脂を製造・販売するウレタン技研工業（本社四日市市天カ須賀新町一ノ二三）。昭和の高度経済成長を支えた化学産業の一員として、ポリウレタンの創成期に深くかかわってきたのが社長の石井隆来さん。「工業高校を卒業して入社した会社には、まだ本社も工場もありませんでした」と当時を振り返る。その後、会社を飛び出し独立。成熟産業となった同業界だが、ニッチな分野に活路を求め、独自の技術力でチャレンジを続ける。石井さんの開発意欲は、今も衰えを知らない。（四日市）

英語資料と日々格闘

宝建材製作所 初代社長ら 技術者の才能見出す

専業メーカーとして保土谷化学工業が子会社日本ポリウレタン工業を設立した。

「第一期社員約三十人は保土谷化学工業と日東化学工業の二組に分かれて研修へ。私は保土谷組で数カ月間は毎日、英語とか、数学とか、また勉強させられる日々になった。仕事は製品の分析・試験だった」

●その後、日本ポリウレタン工業は、現在の山口県周南市に新工場、横浜市には技術研究室を創設する。

「第二次大戦中のドイツで産まれ、世界へ広まったポリウレタン。日本の市場に合ったものを、どうやって開発するかということをテーマに研究開発していた。とにかく、日本と欧米では商品に対する考え方がまったく違うので苦労した八年間だった。そうして開発した技術で、塗料から、接着剤、フォームまでつくることになるわけだ」

●しかし、そのころから会社は大卒社員の採用を増やしていく。社内では石井さんなど高卒組と、待遇面での格差が目立つようになってきた。

「これまで一生懸命やってきたのに、後から入った人間がどんどん先に出世していくことに嫌気がさした。四十五年、二十六歳のときのことだけど、バーンと辞表を出し、実家のある九州へ帰った。途中でやめたのは、社内では第一号だったようだ」

●九州に戻った石井さんは、兄が営んでいた塗装業の手伝いをすることになった。これまでは、どちらかといえばホワイトカラーの研究職場。新しい仕事に、すんなりとは馴染めない。

「やっぱり外の仕事でしょ、雨が降ったら仕事をしないし、長靴はいてやるわけです。一緒に働く職人は中学二年とか大学三年ぐらいの若者ばかりで、しかも自治体から頼まれて保護観察中だったりと。根は純粋なんだけど、目を離すと遊んでるし、何をやらかすかわからないからよく怒ったりした。そんなある夏のお盆中、宴席から帰る途中でトラック運転中に交通事故。相手は一カ月ほど入院。慰謝料を支払ったら退職金が底をついた」

●退職後は、仕事にも希望をみいだせず、また災難も続いた。石井さんは、また元の会社に戻る決断をする。

「幸いなことに、私が辞める時も、辞めた後も、所属していた研究所の長井所長や技術部長の鈴木さんをはじめ、同僚たちが『何かあったらいつでも戻って来い』と何度も電話や手紙でエールをくれていた。それでもう一度頼んでみたら、非常に珍しいケースだと思ったがオーケーが出た。常務からは前の時と同じ給料で迎えるから、その代わり十年間は辞めないでくれと釘を刺されました」

●石井さんは辞めてから半年後、日本ポリウレタンの本社に戻り、技術課に技術研究員として配属された。そのころは、大手化学メーカーが相次いで新会社を設立して参入、熾烈な開発競争を繰り広げていた。

「すべてが外国の技術だから、日本のものは何もなく、資料はすべて英語。毎晩、仕事が終わると分厚いテキストを三ページから四ページ訳して、それを頭に叩き込んできた」

●その後、駐在員として名古屋に赴任。豊田通商をはじめとした各ディーラーの顧問のような形で営業、ポリウレタンのことや技術的なことをトヨタグループなど顧客企業へ提案説明していた。

「名古屋にきて、子会社の桂産業の社長から見合い話を持ちかけられ、四十七年結婚。そして六年後、また転勤話。南陽化成という会社をつくるから本社に戻れという指示。工場は山口県。いろんなところで話したら、おれの会社にきてくれとあちこちから誘われた。もう自分で（会社を）やるしかないなと決断した」

●直前の取引先に、船舶、鉄道電車の床や屋根の工事をする宝建材製作所があり、初代の宇田川能武夫社長（故人）に、石井さんの研究開発力を見込まれた。

「当時の電車の床は塩ビシート。今後の床材は塗りものになる。収縮しないウレタン床材の開発をしてほしい。石井さんにかける。やってくれたら、石井さんから全部買う。そのかわり、開発するまで三年間は自動車に乗らないでくれ。お墨付きをいただいた」

●石井さん夫婦は四日市に引っ越し、半年間、事務所兼研究室を市内の陶栄町に借り、テストを繰り返して完成させた。

「じゃあ量産しようと、前の会社で使っていた下請けへOEM。ようやく飯が食えるようになった。この出会いがなかったら、当社はここまでにはなっていなかっただろう。軽量化、スピード化、アルミボディの流れで今度は屋根材のポリウレタン生産が急激に増えていった」

●こうした変革に対応し、スプレー方式や防水材など次々と開発していく。今後も環境など世の中の動向に対応し、さまざまな分野に用途が広がるという。

「大手の鉄道会社が目をつけて、この製品はどこで作っているんだと。下請けの会社を見せるわけにいかない。そこで薦められて、平成元年に現在の土地を買って工場を作り、初めて社員も募集。ようやく自社生産できるようになった。初代社長の宇田川氏との出会いがその後の発展の礎となり、豊田通商時代では関根部長（故人）には大変お世話になりました。今年三月に三十周年を無事迎えられたことも、いい人との出会いに恵まれたおかげ。ありがたいことです」

ポリウレタンの研究開発には、今も自ら先導して取り組んでいる（創業当時の研究室）

「市場自体の規模拡大はのぞめないものの、環境や安全性の面での開発余地は広がっている」と話す石井さん

ひと言

開発、技術、情報、製品まですべて最先端でなければ生き残れない

プロフィル

いしい・たかき

福岡県立福岡工業高校卒。昭和37年日本ポリウレタン工業入社。55年ウレタン技研工業を設立し社長に就任。福岡県旧糸島郡二丈町出身。64歳。趣味は海釣り、ゴルフ。

四日市市陶栄町の研究室兼事務所で新たなスタートを切る

次回は 永草 昌勝 ナガクサ会長